

平成30年度入学（一般入試 後期日程）試験問題の出典  
看護学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	片桐 新自	不透明社会の中の若者たち—大学生調査25年から見る過去・現在・未来—	関西大学出版部, 2014年より	関西大学出版部

平成 30 年度 一般入試・後期

## 看護学部

### 小論文 (120 分)

#### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、3 ページあります。なお、下書き用紙が 1 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章は、関西の複数の大学を対象に大学生の価値観や意識の変化について1987年から5年おきに調査し、まとめたものの一部である。この文章を読み、あとの問いに答えなさい。(150点)

大学生たちがボランティア活動に積極的に関与するようになったと注目され始めたのは、1995年の阪神・淡路大震災がきっかけだった。この年は後に「ボランティア元年」と呼ばれるようになり、1998年の「特定非営利活動促進法」(通称NPO法)の制定へのはずみとなり、その後大学でもボランティア・サークルが多数できたり、ボランティアを学ぶ講座を生んだりするきっかけになった。

(中略)

阪神・淡路大震災は、関西の多くの大学生にとって、直接的に被災者を知っているような身近な大災害だったが、その後生じた災害等は必ずしも自分たちにとって直接知っている人が被災者になったものではなかった。それでも学生たちは関心を持ち、時には遠距離であっても、救援・復旧の手伝いに出かけた。1997年調査では、2年前に起きた阪神・淡路大震災のボランティアをしたかという質問とともに、調査年に起きた福井県三国町での原油流出事故でのボランティアをしたかどうかを尋ねた。前者のボランティア経験者は63人(8.0%)で、後者は8人(1.0%)だった。数自体はもちろん少ないが、行かなかった人でも「興味がなかった」と「無意味だと思った」といった否定的な理由をあげた人は、阪神・淡路大震災で14.3%と2.4%、三国の原油流出事故で18.9%と3.9%でほんのわずかしかない。行かなかった理由で多かった回答はどちらも、「家が遠かった」、「時間がなかった」、「ツテがなかった」、「なんとなく行きそびれた」といった消極的なものである。

そして、今回の調査(2012年)は前年に起きた東日本大震災の記憶もまだ生々しい中で行われた。関西の大学生たちでも東北にボランティアに出かけた者たちが少なからずいたので、ボランティア経験者は増えているのではないかと予想していたが、前回の2007年よりも減っていた(2002年40.3%→2007年53.4%→2012年45.6%)。災害の救援ボランティア活動に参加するかどうかは、やはり起きた場所にかなり影響されるようだ。

それでも、今後災害が起きた場合に、その救援ボランティア活動をしたいかという意欲に関しては、「ぜひしたい」と「ややしたい」を選ぶ人の比率が2002年から2007年にかけて下がっていたが、今回は戻った(1997年46.1%→2002年52.5%→2007年46.2%→2012年52.9%)。ここには、やはり東日本大震災の影響が出ているのではないだろうか。ああいう大災害が起きたら、自分たちなりにできることをすべきだという気持ちを持った学生たちは多かっただろう。

しかし、大学生たちのボランティア活動全般に対する意欲は単純に増大しているとも言いにくいところがある。経験したボランティア活動の種類について尋ねた2002年調査の結果によれば、経験者が多いのは、「社会福祉活動」が123人と圧倒的に多く、「災害援助・防災活動」は11人とわずかしかない。それゆえ、2012年調査で、ボランティア経験者が2007年よりかなり減ったのは、東日本大震災が関西から遠かったからといったことが主たる理由ではなく、福祉ボランティアを中心とした平常時に行うボランティア活動に、一時ほどの参加意欲を学生たちが持たなくなりつつあることの結果なのかもしれない。実際、表を見ると、福祉ボランティア活動を「したい」という人は2002年をピー

クに増えていないのに、「したくない」人は確実にじわじわと増えているように見える。1日限りの参加でも喜ばれる災害救援ボランティア活動と違い、福祉ボランティア活動は継続性を求められる。それだけの労力を使ってでもボランティアをしたいと思う人は決して多くはないということだろう。

表 福祉ボランティア活動への参加意欲

	1997年	2002年	2007年	2012年
ぜひしたい	12.1%	13.6%	12.3%	11.3%
ややしたい	29.9%	33.0%	27.2%	29.6%
一概に言えない	36.5%	30.3%	33.6%	31.3%
あまりしたくない	15.1%	18.6%	18.8%	19.3%
まったくしたくない	6.2%	4.6%	7.7%	8.0%
無回答	0.1%	0.0%	0.3%	0.5%

もともと私は、大学生の半数前後というそれなりに多くの若者がボランティア活動をしたいという意欲を持っていることの説明としては、FEV基準に基づいて意欲の湧く活動だからという点と、自らの存在意義を確認できる活動だからという点をあげてきた。FEV基準とは、「すばやく」(Fast)、「効率的に」(Efficient)、「目に見える形で」(Visible)の頭文字を取って作った私の造語だが、要するに「結果がすばやく効率的に見えること」が行動を起こす基準となることを示したものである。災害救援のボランティア活動では、1日だけでも感謝の言葉が得られるし、それでもよいのだろうと思えるのに対し、福祉ボランティアとなると、1日だけではいけないのではという意識が学生たちにも働く。FEV基準に照らせば、やはり災害ボランティア活動の方が福祉ボランティア活動より意欲が湧く活動<sup>(1)</sup>ということになる。

自らの存在意義の確認という点に関しては、ボランティア経験の充実感と関係が深い。ボランティア活動をした者の8割以上(2007年82.1%、2012年81.8%)が充実感を得たと答えているのだが、その充実感とは1997年調査の際に得られた、阪神・淡路大震災のボランティアを経験した女子学生の次のような言葉に端的に表されている。

「最初は、「結果」というものが目に見えてこないのとまどいましたが、何かボランティアをした後に、お年寄りの方が「また来てほしい」と言って笑顔を見せられた時に、これが「結果」なんだと感じた。その笑顔にボランティアすることの意味を見い出した気がした。」

肯定的感想を持った人の多くが、こうした言葉と笑顔に充実感を得ていた。「また来てほしい」という言葉は、自分が誰かにとって必要とされていることをわかりやすい形で確認させてくれる。自分がどういう方向に進めば価値のある人間になりうるかが見えにくい不透明な社会の中で、こうした目に

見える“結果”が得られるなら、ボランティア活動は若者たちにとって魅力的な活動になる。そして実は、たくさん友人を持ち、その友人関係の中で必要とされるのも、ボランティア活動で必要とされるのも、人間関係の中で自分の存在意義を見出すという点では本質は同じなのではないかとかつて分析した。この分析自体は今でもはずれていないのではないかと思っているが、それゆえにこそSNS<sup>(1)</sup><sub>(2)</sub>が普及する時代においては、以前より容易に友人関係の中で、自分の存在意義を確認ができるようになってきているため、つらいボランティアをしてまで自分の存在意義を確認したいという意欲は相対的に弱まっていてもおかしくない。

(片桐新自『不透明社会の中の若者たち—大学生調査25年から見ると過去・現在・未来—』, pp.125-128, 関西大学出版部, 2014年より, 一部改変)

注) SNS : Social Networking Service の略称

問 1 下線部(1)について、なぜ大学生は災害救援ボランティア活動に参加意欲がわくのか、本文をふまえて、その理由を箇条書きで3つあげなさい。

問 2 下線部(2)について、なぜSNSが普及すると自分の存在意義を確認できるのか、具体的な例をあげて150字以内で説明しなさい。

問 3 学生がボランティア活動に積極的に参加するためにどのようなことが必要か、本文をふまえて、あなたの考えを600字以内で述べなさい。